

## 大切なのは、日頃からの災害対策

小山 剛（認定NPO災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード代表理事）

本業は高齢者サービスを中心にやっていますが、二枚看板のもう一つとしてサンダーバードの代表をしています。

基本的に人の生活を支える仕事をしているのですが、人のケアというは災害には関係ありません。人の生活に休みはなく、地震や津波がきてもご飯も食べるし、トイレにもいきます。周りの環境がどうあっても、人の生活というのは支え続けなければならぬのです。

このことを基本に作ったサポートセンターを全国の仕組にしようと、全国から仲間が集まって、災害福祉広域支援ネットワークとしてサンダーバードを設立することになりました。

サンダーバードの名称は、1965年に製作された英国のテレビ人形劇から。番組では国際救助隊として活躍する団体で、舞台は2026年です。そのサンダーバードを20年も早く作った、「すごい」と、仲間では盛り上りました。

### ●日頃の災害対策が重要なのです

自然災害や人為災害は良く知られていますが、介護災害に思い至っている人はほとんどいません。日常生活が送れないというのが災害の状況であり、突然1人になつたら明日から何もできなくなるというのは、それに当たります。1日3食きちんと摂れているか、きちんと公的な支援人が来ているのか、そういった普通の生活が送ることに支障が出ていれば、それは災害になります。

ただ、それに気付いておらず、自分が被災地

にいると分かっていない人があまりにも多いです。「家族がいなくなつて生活ができるのか」、「家族に代わる公的な介護ができるのか」、こういったことに気付かなかつたからこそ、阪神淡路大震災の時には山の中に施設をつくることになりました。そして、介護災害に遭つた人々は、住みなれたところから離れることになりました。

そういう現状の中で、中越地震に遭つたので、自然災害と介護災害の結び付けを考えるようになりました。

先日、東京に雪が降るといつてニュースになつてきました。実際、東京で10cmも積雪があれば大災害になります。ですが、新潟で4cmの積雪があつても義援金を募らうと言う動きはしません。みんなで準備して、災害に耐える力を持っているからこそ、あまり問題にならないのです。災害というは、日頃の準備ができていなければこそ発生するものもあります。



阪神淡路大震災も中越地震もそうでしたが、レスキューではなく隣近所が助けに来てくれるということを忘れてはいけません。特に水害や

放射能といったスピードが、生死を分ける場合は特に隣近所とのかかわりが大事になります。

ただ、隣近所の重要性を東京で話すと「それは田舎だからできるのであって、都会では無理です。都会では隣に誰が住んでいるのか分からないんですから」というように言われます。しかし、そういうことではなく、助かるためにどうするかということなのです。助かるためには、隣近所を知る必要があるということです。

災害で助かるためには、隣近所とのかかわりが重要なということを刷り込んでいく必要があります。いざという時に困るのは自分ということになるのです。



### ●介護を現場で育て組織化する

災害で学んだこととして、広域連携の重要性があります。地域全体が落ち込むので、外からの助けがないと、自分たちだけでは立ち上がることはできません。ただ、ガスや水道といったライフラインを復旧するためには、遠隔地から多くの人が訪れます。ですが、介護は来ないのです。このため、組織化して介護を連れて來るのが、サンダーバードの役割の一つです。

被災地には、たくさんのボランティアが来てくれます。ただ、何も持たずにボランティアに

来られるのは迷惑なのです。食べるところも眠るところもない被災者の下に何も持たずに来るのは、邪魔以外の何でもありません。

しかし、彼らの気持ちとか力は大切で、できるだけ生かす必要があります。自衛隊のような装備を個人が用意できるわけがないのは事実で、ボランティアが活躍できるように、食べる所や眠る場所を整備するのもサンダーバードの役割の一つになります。

ボランティアに来る人々は、個人であれば、どれだけやる気があっても、仕事を休んでこられるのは1週間程度です。被災地では、もっと長くいてほしいと思います。その差を埋めるには、ボランティア団体を活用することができます。

中越地震の際には、東北福祉大学の学生たちを活用しました。25~30人を1班として、10日にわたって被災地で2ヵ月近くにわたって活動しました。学生たちの指示は担当としてついてもらつた先生たちにやってもらいました。学生たちには、住む場所を用意して、必要なものは全て持ってきてもらいました。

あの時、長岡に来た学生たちは、今はケアマネージャーなどとして現場で働いています。被災地にも何人もいました。その学生たちが、あの時の体験はとても役に立ちました、と言ってくれて、とてもうれしかったですね。

### ●24時間365日支えるサポートセンターを

生活を24時間365日にわたって支える場として、サポートセンターを仮設住宅のあった千歳につくりました。サポートセンターの補助制度など何もなく、誰も支援してくれなかつたので、自費でまかないました。運営は赤字です。非課税である社会福祉法人は、何かあつた時に真っ先に動く必要があります。収益をあげるの

1

ではなく、地域社会に満足してもらうために活動するからこそ税金を支払わなくていいのです。現在では、市内14カ所でサポートセンターは運営しています。

能登半島沖や中越沖地震などの際にも、サポートセンターを作りましたが、使用法を運営者が分かっていないため、ほとんどがお茶のみ場となっているのがネックでした。中越地震から7年、今回の災害では100カ所以上のサポートセンターができましたが、実際に災害を経験していないこともあり、うまく機能していません。



人が暮らすというのは、人に支えられているから成り立ちます。24時間365日支えているからこそ、安心して生活ができます。仮設で暮らしていくとも、支える組織がなければ、別の場所に行く必要がでできます。コミュニティの関係性を切らないでいくための施設として、サポートセンターがあります。東日本大震災で作られたサポートセンターは、国が資金を負担して、診療所なども併設する施設もあります。

ただ、東日本大震災では土地がないため、仮設住宅が10人、20人といった単位で山や水田の中に点在しています。バスも駅も傍になく、店もありません。誰かが巡回しないと、暮らしていくことも難しい所もあるのです。

仮設住宅で生活している人は、震災で職を失っている例が多いです。施設として24時間型の

サポートセンターをつくるというのは新設になるので、新たに職員を採用する必要が出てきます。もちろん、介護について知らない素人ですから、私たちが行ってサポートする必要があります。復興に合わせて、仮設住宅はなくなりますが、サポートセンターはそのまま新しい町の中心とすることもできます。職員もスライドさせることで、その後の復興を引っ張る役割も与えることができます。

災害時の避難所としては、通所介護と小規模多機能型通所介護事業所を福祉避難所として契約を結ぶようにしています。全国に通所介護と小規模多機能型通所介護事業所は2万5000カ所あり、1中学校区に2~3カ所が置かれます。調理場や風呂、集まる場所もあり、こんな便利な避難所はありません。町の多くにあるので、注意深く見てください。

### ●心のケアは地元の人人がすべき

緊急に備えて、水や食料を確保している団体、個人はたくさんいます。しかし、水などは特に使わないで廃棄処分したりする例は多いです。その水も酒屋や清涼飲料水メーカーに行けば、日常的にたくさんあります。車もメーカーに行けば、万単位でストックがあります。

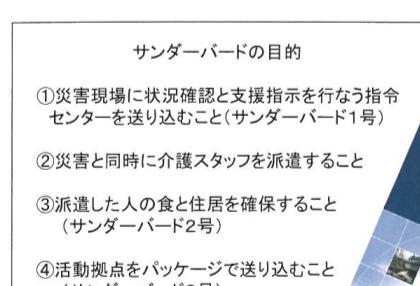
災害のために用意するのではなく、専業の



3

ところから、いざという時に流してもらえる体制をつくるのが重要です。これが眞の意味での地域連携へつながっていくと思います。

地域連携という点では、物を運ぶのは外部の人でも問題ありませんが、被災者の心のケアは地元の人が行う必要があります。鹿児島の人が、福島に行ったからといって通用するものではないのです。それは言葉という意味ではなく、気持ちの問題です。地域の生活のやり方、歴史、考え方を知っている人が接することで、被災者の心は安らいでいくのです。



### ●横に入って、迷惑にならず支援する

外部の人間は中核病院や施設で、中の仕事をし、地元スタッフに地域へとできるだけ出て行ってもらう必要があります。

また、さまざまな分野で、専門職が増え問題解決への鋭さは増しています。ですが、それは縦になつてきています。今回の震災では、体育館に避難しているおばあちゃんに、5つの団体が1日に同じような質問をしました。これでは、被災者の負担にしかなりません。

誰かが横に入らないとうまく回りません。横に入る存在としての役割が、サンダーバードには求められているもの一つではないかと思っています。

こんなことをしてみたいといふ思いのベースになったのが、7年前の地震です。そこから、さまざまなものがあり現在のような活動になりました。これからも、さらに展開していきたいです。

